

# 第14回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 【優秀書評賞】

納谷 海斗（社会学部 3 年次生）

「拳の近代: 明治・大正・昭和のボクシング」

木本 玲一 / 現代書館(2018 年)

## 【佳作】

坂本 英彰（市民利用者）

「極夜行」

角幡 唯介 / 文藝春秋(2018 年)

井上 保教（社会人聴講生）

「なんとめでたいご臨終」

小笠原 文雄 / 小学館(2017 年)

## 【総合講評】

図書館長 梅山 秀幸 国際教養学部教授

先日、日本の高校生の「読解力」が急激に低下しているとの新聞報道があった。今さらいわれなくとも、それは教育の現場にいる人間として日々ひしひしと感じ取っていることである。若者の活字離れが問題となって久しく、出版関係者と接触しても、業界の氷河期が長々と続いている様子は常々聞かされている。氷河は凍てついたまま拵がり続けている。すでに Literacy の不足というより、今や Illiteracy の社会になりつつあるのかもしれない。ジョージ・オーウェルの『1984』ですら思い及ばなかった社会である。

面白い本が出されていないわけではない。というより、実際には本自体がわくわくするような一つの未知の世界のほずである。一冊の本を手に取り、読み進んでいけば、新しい世界がひらけ、読み終えたなら、一冊分の世界を自分のものにした

ことになる。そして二冊目、三冊目・・・生活の場を移さなくとも、無限に多くの世界を自分のものにすることができる。それは知識とか蘊蓄といわれるものとはまた別の人間としての豊かさを形成してくれるはずである。

総評をするのに、思わず説教から初めてしまいそうである。今回の「図書館書評賞」の催しへの応募数は極めて少数で、12 点であった。その中で決められた書式に沿っていないもの 3 点を除いた 9 点について第一次審査を行い、通った 7 点についてさらに検討して優秀作 1 点、佳作 2 点を選んだ。昨年度の応募総数は 35 点であり、10 年ほど前までは 100 点を超える応募があった。実に残念な事態だといわざるをえない。この減少の傾向は、学生諸君の読書離れをやはり象徴しているように思われる。そして、さらに残念なことに、優秀賞、佳作に選ばれた 3 名のうち、2 名は社会人の方であった。肩書への忖度なく、匿名性をもとに選んだ結果であり、社会に開かれた大学であり、

地域にも貢献すべき図書館のあるべき姿として、  
けっして悔やむ必要もないし、ここで取り立てて言  
及するのは社会人の方に失礼だとは思ふものの、  
やはり一抹の寂寥感に襲われざるを得ない。

第一次審査を通過したのは次の 7 つの作品を  
書評した7点である。

- 1、小坂流可著『余命 10 年』文芸社
- 2、角幡唯介著『極夜行』文芸春秋
- 3、木本玲一著『拳の近代：明治・大正・昭和  
のボクシング』現代書館
- 4、関谷大輝著『あなたの仕事、感情労働です  
よね？』花伝社
- 5、有川浩著『レインツリーの国』KADOKAWA
- 6、鎌田洋著『ディズニーキズナの神様が教え  
てくれたこと』SB クリエイティブ
- 7、小笠原文雄著『なんとめでたいご臨終』小  
学館

これらの作品の書評を 5 名の図書館委員が選  
考した結果は、次のようになった。

優秀賞：3を取り上げた納谷海斗君  
(社会学部3回生)

佳作：2を取り上げた坂本英彰さん  
(市民利用者)

7を取り上げた井上保教さん  
(社会人聴講生)

それら 3 つの書評についての評を以下に記す。

**優秀賞 納谷海斗君：木本玲一著『拳の近代：  
明治・大正・昭和のボクシング』現代書館**

対照となる書物は興味を引く内容のものである  
にしても、先鋭的な社会学を踏まえた文化社会学  
者の難解な語句や言い回しが無いわけではなく、  
また厳密な考証も行われていて、必ずしも読みや  
すい本ではなかったと思われるが、ボクシングを  
例にとった海外文化の「ローカル化」について、そ  
の内容を的確に把握し、適切に紹介することがで  
きている。また全体としてこなれた文体で執筆さ  
れていて、書き出しのカリフォルニアロールの例  
も生きていて、評者の文章能力も優れているとい  
っている。一方、批評という点ではもう少し踏み込  
みがほしいところである。また、この本の「文化社

会学を学ぶうえでは非常に分かりやすい」と記さ  
れているが、どういう点が分かりやすいのか、具  
体的に書くほうが望ましく、「最優秀賞」とするの  
はやや躊躇われる。

**佳作 坂本英彰さん：角幡唯介著『極夜行』  
文芸春秋**

対象図書の内容が整然と紹介されており、書  
評としての完成度は高い。

なによりまず、極夜のもとでの数ヶ月にわたる  
探検の凄まじさや、極限状況に陥った探検家の  
ゆれうごく心情、苦闘の末に探検家が到達した洞  
察など、対象図書のハイライト部分が実に手際よ  
く抽出整理されており、対象図書の魅力をよく伝  
えている。

さらに、地球上のあらゆる場所が探検しつくされ  
た時代に探検家という「職業」は存在しうるのかと  
いう冒頭(第一段)の問かけや、探検家の悟り  
を「原始的な宗教意識の始まりのようなもの」(第  
八段)と言い換えるあたりは、執筆者自身の独自  
の解釈による巧みな表現といえるだろう。

おしむらくは、表現にいますこしの深みがほしい  
と思わせる箇所がなきにしもあらずという点であ  
ろうか。たとえば、探検家の試みを「地理的な体  
験にいわば内面への探検を重ねるという斬新な  
方法」とした部分(第二段)、あるいは「システム」  
という語の若干あいまいな使い方(第三段)、「困  
難の出現をチャンスととらえる姿勢は古典的な探  
検家にはない」(第五段)といった表現など。

とはいえ、読む者をして対象図書を手にとって  
みたいと思わせるに十分な文章であり、本学書評  
賞佳作に値する秀作であることに間違いはない。

**佳作 井上保教さん：小笠原文雄著『なんとめ  
でたいご臨終』小学館**

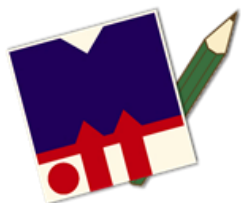
本書は、筆者小笠原文雄氏が医師として在宅  
医療でこれまでに関わってきた患者とのエピソード  
を紹介するものである。

書評では、本書の構成を示しながら内容を簡  
潔に要約するとともに、本書に込められたメッセ  
ージを読み取り、評者の見解を交え上手くまとめ  
ている。書評と対象図書の内容に矛盾点はみられ  
ず、文章も読みやすく記されている。

医療とは何か、筆者の医療に対する信念や考  
え方を読み解いていくなかで、筆者は死をどのよ  
うに考えたらよいかという死生観を読者に問いか  
けているという解説は、評者独自の視点から述べ  
られたものとして評価できる。また、筆者の献身

的な看取り医療への共感を示しつつも、患者や周りで支える人々の死生観という観点から看取り医療の課題について言及している点には、本書を批評的に捉えようとする評者の姿勢が窺える。

ただ、本書の特徴(良い点と悪い点)に関しては、もう少し直接的な言及があってもよかったように思われる。



### 【 優秀書評賞 】

「拳の近代: 明治・大正・昭和のボクシング」  
納谷 海斗 (社会学部 3 年次生)

海外でも人気の日本食、寿司であるが、その中でカリフォルニアロールという巻き寿司が存在するのをご存知だろうか。この寿司は、海苔が外側ではなく内側に巻き込まれ、多くの場合、生の魚介類ではなくアボカドやカニかまぼこを使用しているという特徴がある。これには、海苔を不気味に感じ、生ものを敬遠するアメリカ人に向けた寿司として開発された経緯がある。生のネタを、にぎりで提供することこそが「寿司」であるという日本人にとっては、やや異質な存在にも思える。

本書は、このような現象を「ボクシング」という競技を軸に研究、分析している。明治以降、西欧諸国の模倣をして近代化を図ってきた日本であったが、様々な文化を大量に輸入したものの、ほとんどの場合、日本人にとっては触れたことのない存在で、拒絶されることもままあった。だが、本書のテーマとなっているボクシングの場合、それまでの柔道と融合した「柔拳」という格闘技に出発点を見出し、そこに本場アメリカとは異なった、武士道精神や師弟関係といった日本独自の要素を盛り込むことに成功した。これにより、ボクシングを国民的イベントにまでのし上げ、終戦直後まで発展するに至った。

著者は、外来文化が一つの国に持ち込まれ、それが定着・普及していく過程を「ローカル化」と称している。ボクシングの事例でみれば、明治期の手探りの状態から、大正・昭和初期の国民的イベントにまで成長していることから、ローカル化はたしかに達成されている。しかし、中身に目を向けてみると、武士道精神や上下関係が重んじられたり、練習場所や興行において強烈的な派閥

が存在していたり、はたまたナショナリズムを扇動したりと、本場アメリカにはなかったような性質が大量に付加されている。ナショナリズムとまではいかなくとも、アスリートの勝敗に一喜一憂し、隣の他人と一つの集団としてスポーツ観戦を楽しむというような構図は、現代のオリンピックや高校野球にも通じるのではないだろうか。

つまり、他国の文化を自国に純粋な形として持ち込もうという動きがはじめにあり、その後自国に合う受け入れられやすい形で、独自に発展し普及していくという過程が確認できる。このような開放的な精神と、閉鎖的な発展という一見相反する事象こそが、「ローカル化」の真髄であると筆者はこの本を通して述べている。

ここで本書を概観しておく、第一章で学術的な予備知識、第二章でボクシングの黎明期、第三章から第五章で戦前から戦後までのボクシングについて述べられているという構成になっている。

本書における長所は、なによりボクシングという一見マニアックな視点をを用いているにもかかわらず、その背後にある社会との関係が明確に理解できる点である。もし、この書籍がボクシングの変質にのみ注目していたならば、それは単なる趣味本にしかすぎないだろう。だが、ボクシングと社会の関係を通して、大衆やメディアの思惑が錯綜しながらかわりゆくことにスポットを当てていることが、この本の醍醐味でなかろうか。

また、本書では戦前のボクシングにおいて、反社会的勢力が相当の力を持っていた点についても明らかにされているが、過去の出来事を現代的な視点で批判するのではなく、あくまで歴史的な事実として言及するという著者の姿勢そのものも評価に値する。

ただ一つだけ、この本における短所に言及するならば、それは引用、特に歴史的仮名遣い(旧字体)の資料が多いことである。実際、著者の考えを補完する世論の価値観や、ボクサーの心情を読むという作業に滞りが出てしまったのは否めない。学術書であるから致し方ないとしても、もう少し要点のみに絞ったり現代語に噛み砕いたり、改善の余地はあったのではないか。

総括すれば、この本は「文化社会学」を学ぶうえでは、非常に分かりやすい書籍であるといえる。本書の第一章で述べられていたような社会的な理論というものは、ボクシングに限らず他の文化を研究・分析する際にも非常に役立つと考えられる。

## 【佳作】

### 「極夜行」

坂本 英彰（市民利用者）

時代とともに様々な職業が消滅した。郵便の登場で飛脚がなくなり、識字率の向上で代書屋が消え、パソコンの登場で植字工が転職した。この系列に探検家が入ってもおかしくはない。南極点にも北極点にも、世界一高い山にも人類は足跡を記した。シンプルな一番乗りはもはやない。後の探検家たちは「単独」「無酸素」「最年少」などの条件付きか、「初」といってもあまり有名ではない山や場所にならざるをえない。グーグルで全地球表面を見ることができるようになった21世紀に、探検家は存在するのだろうか。

探検家にとって生き残り困難な時代に、地理的な探検にいわば内面への探検を重ねるといふ斬新な方法を提示してみせたのが角幡唯介氏のノンフィクション「極夜行」だ。白夜の反対に、太陽が一日中水平線に出ない極夜。一匹の犬とともにソリを引いて、グリーンランドにある世界最北の集落を出発し、氷とほぼ闇の世界を約2カ月半にわたって歩き、同じ集落に帰還した。自らの探検を準備段階から描いたのが同書である。

筆者は、自らの探検を「脱システム」だと考える。昼は太陽が照らし、夜に人工照明が灯る世界を、私たちは当然のこととして生きている。車が向かってきても、自分の側の信号が青なら横断歩道を渡る。車は手前で止まるはずだからだ。こうした現代人を取り巻く当たり前の世界をシステムととらえ、その外に出ることで何が見えてくるのかを体得したいという。最北の集落とはいわばシステムが及ぶ地理的な限界であり、そこを出入り口としてシステムの外に広がる極夜を探検したのだ。

筆者はカーナビやスマホの地図アプリに入っているGPSを使うことを拒み、天体を測って位置を知る六分儀を使うと決めた。「テントの中でポテトチップスでも食べながら」でも位置がわかってしまうGPSこそ現代のシステムを象徴するものと考えたからだが、それは一方で自らの命を危険にさらす行為でもあった。あろうことか歩き始めて15キロの地点で、猛烈な暴風に遭遇し六分儀も失ってしまうのである。

不運を嘆く一方でこうも書く。「より深い極夜性が発見できるかもしれない、これはむしろ僥倖といえるのではないか」。困難の出現をチャンスととらえる姿勢は、古典的な探検家にはない。頭でっかちともいえる哲学的な思索の数々にやや食傷

していたかもしれない読者も、ここでぐっと引き込まれる。いったいこの先、何が起きるのだろうか。

実際にこれ以後、真っ暗闇のなかで自分がどこにいるのかわからないという、究極の迷子とでもいえる状況に何度も陥る。少しでもルートを間違えると帰還不能の谷間に入り込んでしまう可能性もある。一方、絶体絶命の状況に陥るなかで目や耳、皮膚といった身体感覚がどんどん研ぎ澄まされる。星空との対話は象徴的だ。こんな記述がある。

「北極星は天空の神として私がただしい方向に進んでいることを啓示し、そして私はその啓示を受け取り安心していた。それは見上げるというより、実質的には崇めるといふ行為に属している」

原始的な宗教意識の始まりのようなものが、個人の体験として内面にわき上がるのだ。

真っ暗な氷の台地を歩き続ける旅は肉体的にも、精神的にも追い詰める。過酷な環境に肉体をさらすことは、人類のはじまりにさかのぼっていく内面の探検ともなる。

探検の準備を進めているときに東京で妻の出産に立ち会った場面が書かれている。長女がこの世に現れた瞬間を「子宮の暗闇から狭い産道をくぐり抜けた瞬間、彼女の全面には眩いばかりの光が広がった」と、わが子になりきって描く。そして闇夜を歩く自分はまだ生まれる前の、母の胎内にある胎児なのだとメタファーが、強く意識されるのである。

唯一の相棒である犬との関係は、絶対王者として他の動物の上に君臨する人間の原罪に触れる。一緒にソリを引き白熊の出現を知らせる実用以上に、精神的にも強く依存する存在となるが、食料計画に誤算が生じて飢餓に陥る可能性が出てくると、こう考える自分に気付くのである。

「結局のところ、私は最後は食ってしまおうという態度でこの犬に臨んでいる。この生きる者としての罪深き歪な心性こそ、究極のところで顕わになった私という人間のまぎれもない本性」だと。

すべての思索は快適な机上ではなく、極夜の下で行動する間に浮かんでくるものだ。それゆえに読者は氷点下40度の暗闇のなか、苦しい息を吐きながらソリを引く筆者の行動を追体験しながら読み進めることになる。白熊に備蓄食料を食い尽くされたときの絶望も、宇宙空間を歩くような壮絶に美しい景色の感動も一緒に味わいながら思索するのだ。周辺数百キロに人間がいないばかりか、自分の位置を知る者すら地球上に誰もいな



いという体がすくむような孤独と、無限の自由を感じさせてくれる。

見えなかった、あるいは見えていても感じなかったシステムが読後、ありありと浮かんでくる。長い極夜を歩いた最後、筆者が太陽を見て何を思うのか。それも本書を読み進める楽しみのひとつである。



「なんとめでたいご臨終」

井上 保教(社会人聴講生)

「臨終」とは、死を迎える直前の時のことであり、普通「なんとめでたい」という表現と組み合わせて使われることはない。私がこの本を手にしたきっかけはこの違和感であった。しかし、この本を読み進むにつれて、なるほどそういうことか！と納得した。

著者は、在宅医療を行う中で在宅ホスピス緩和ケアに到達した医師である。実績が半端ではない。在宅看取りを1300人以上、一人暮らしの看取りを70人以上と接してきた。看取りということから死期の近づく患者により高いQOD(Quality of Death)を求めることを目標としている。つまり、限られた余命の時間を有効に使い「安らかに、おおらかに、朗らかに、清らかに旅立つ」ことを理想のゴールにしていくことである。著者が繰り返し述べている「QOD の高い希望死、満足死、納得死」を実現する営みである。本当にこういったことが実現されているのかを、本書では45人もの事例を挙げて読者に示している。①在宅であるメリットの実例、②在宅での安心感の重要性、③2000年から始まった介護保険制度の恩恵、④「なんとめでたいご臨終」の顕著な例、⑤在宅医療ができにくかった例、⑥在宅医療がもたらす「命のつながり」の価値といった内容を6つの章でそれぞれ実際の患者さんたちに焦点を当ててありのままの姿をこれでもかこれでもかと読むものを引き込んでいく。

この流れの中で感じ取れるのは、医療とは何か？という問いかけでありそれに対する著者の示す新しい視点である。多数の人の医療への絶対的信頼は今でも圧倒的であろうが、医療不信も着

実に増加している。私たちは体や心の不良状態が続くとき病院に行く。医師はエビデンスに基づく治療を行い、医療従事者が入院生活をサポートする。この流れで健康が回復できるのは医療から受ける恩恵であり、病院の存在は頼もしく安心できる。ところが、もし、その病が不治の病で回復の見込みが極めて低い場合が問題である。ここではそういった人々にとっての治療である。例えば、末期ガンなどの重篤な患者に対して強い副作用を引き起こす可能性のある抗がん剤の服用、身体や心に負担を強いる度重なる手術などで疲れ切った人たちにはどう対処していくべきか、ということである。著者はそういう人たちには病院の治療ではなく、人生のエンディングを住み慣れたところで安心した生活をおくることが必要だという。

さらにまた、人間一人ひとりにとって最も重大な人生のエンディングである「死」というものをどう考えたら良いのか？という死生観を訴えかけているようにも思われる。これは、近年「死の非日常化」が進み、死は忌避すべきものとみなされている。そこから、考えたくないという気持ちになり、死は長い人生のゴール地点だという実感が伴わないのだろう。この著者小笠原医師は人の死は「マラソン」のゴールのようなもので「よく走り切ったあなたにおめでとう」と言いたいのだろう。また、その人の最後の「走り」を見守って応援した人々にも「みなさんも共におめでとうと考えましょう」と促している姿が見て取れる。

読了後、小笠原医師の奮闘努力には同意するところが多く、患者に寄り添う姿に感動を覚える。これから第二第三の小笠原医師が数多く出てくることを切に願うばかりだが、医療関係と患者とその周囲の人たちには課題が山積しているように思える。特に、先ほど言及した「死生観」が厄介である。小笠原医師が看取りをした人たちは、命に限りがあることを自覚して残った人生を充実させたいという認識があるのがわかる。しかし、人は死を不安としてしかとらえず、少しでも生き永らえたいという望みが強くなるのが多数である。そこをどう話して理解してもらえるかが重要なスタートとなるのだが……。難しい！



## 書評とは・・・「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

### <今回の募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後 5 年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
  - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
  - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
  - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件(主要項目のみ抜粋)**
  - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
  - ・本文は 1,500 字以上 2,000 字程度とする。
  - ・A4 版横書き、全てを 1 ページに収める。本文は、40 字×50 行の設定とする。
- 募集期間** 2019 年 5 月 15 日(水)～10 月 3 日(木)
- 入選発表** 2019 年 11 月 29 日(金)
- 授賞式** 2019 年 12 月 18 日(水)
- 応募点数** 12 点
- 入選各賞**
  - ①**最優秀書評賞** 1 篇 表彰状および副賞(図書カード 1 万円)
  - ②**優秀書評賞** 2 篇 表彰状および副賞(図書カード 5 千円)
  - ③**佳作** 5 篇 表彰状および副賞(図書カード 3 千円)

☆次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)

